

京都図の思想

—洛中と洛外の間—

一 シーボルトの「ミヤコのパノラマ」

ここに、一枚の京都鳥瞰図がある。「ミヤコのパノラマ」(PANORAMA VAN MIAKO)という名称のこの鳥瞰図はシーボルトの『日本』(Nippon)に収められている。ミヤコを西から東へ鳥瞰したこの「パノラマ」は、相当にデフォルメされた近世京都の姿をわれわれに見せてくれる(図一参照)。

画面の中央のやや下方にかなり大きい城が描かれているが、二条城であることは明白だ。二条城のすぐ上方に川が描かれているが、堀川である。この堀川と画面のやや上方に大きく別の川が描かれているが、それは鴨川である。堀川と鴨川にはさまれたように、京都の市街が密集した屋並で埋め尽くされるように描かれている。鴨川の東の洛東一帯も、東山の山腹近くまで家々が迫っているように描

かれている。画面の最下方の右手には嵐山があり、左手には双ヶ丘と金閣寺とおぼしい寺が描かれている。下方の中央には広沢池であろうか、山に囲まれた池が描かれている。市中を、四つの大きな道が横断しているように描かれているが、二条・三条・四条・五条通りであろう。

このように、この「ミヤコのパノラマ」に描かれた部分部分を見ていくと、非常に正確に近世京都の鳥瞰になっているように思われるが、全体的な印象がわれわれに与えるものは、チグハグなものがある。それは一体なんであろうか。困惑の原因を整理してみると、細かい点を除外すれば、京都の市街地が京都盆地いっぱいにつきぼりと収められ過ぎていような感じを与える点である。西陣と御室とは、あまりに近すぎる。島原や東寺と嵐山は、隣りあっているように描かれている。鳥瞰図を描くさいの技術的限界のために、この

園田英弘

ようなデフォルメされた京都が描かれることになったのか、それとも「ミヤコのパノラマ」の限界は外国人の日本観察者の限界なのであるか。あるいはもっと別の理由が、あるのであろうか。

そもそも江戸参府の途中で数日間だけ京都に滞在したシーボルトが、帰国後にむこうの画家にこのような精巧な鳥瞰図を描かせることができたのはなぜであろうか。じつは、「ミヤコのパノラマ」には、日本人の描いた元絵があった。黄華山が文化五年（二八〇八）頃に描いたといわれている「華洛一覽図」である（図二参照）。黄華山は岸駒派の画家で、四条・丸山派の写実主義の影響があったと言われている。「華洛一覽図」は、「一覽図」の最初のものともいえるべき作品である。『日本絵類考』は「一覽図」について次のように述べている。「一覽図は土地の方位経緯の度数に拘らず、山川村市名所旧跡等すべて一紙の中に縮めて画きたる地図をいふ、京師の人横山華山はじめて華洛一覽図を製す、この図大に世に行はれしが、歛形惠斎これに倣ひ江戸一覽図を画き更に世人を驚かす、これ江戸八百八町を一紙の中に縮めたるを賞するなり」（矢守一彦『古地図と風景』所引）。

シーボルトの「ミヤコのパノラマ」と「華洛一覽図」とは、基本的な違いはない。もちろん細かい点では、両者にはいろいろと違いがある。「華洛一覽図」には東山の中天に朝日とおぼしきものが描かれているが、「ミヤコのパノラマ」にはそれはない。「華洛一覽

図」には伝統的な屏風絵の手法である「雲」が嵐山の部分や比叡山の山麓一带に描かれているが、「ミヤコのパノラマ」にはそのような「日本的」手法は無視されている。たしかにこのような細かい違いはあるが、「華洛一覽図」の構図は「ミヤコのパノラマ」にそのまま踏襲されている。つまり、「ミヤコのパノラマ」に対する「困惑」とわたしが述べたものは、「華洛一覽図」のもつ特色に対する「困惑」でもあるのだ。

「ミヤコのパノラマ」や「華洛一覽図」の全体の構図が、京都盆地のなかで「洛中」の部分に不当なほど大きな位置をあたえているのはなぜか。さらに、「洛外」の特定の部分を不当なほど強調しているのはなぜか。もちろん写真ではなく鳥瞰図なのだから、現実の模写である必要はない。むしろある意図をもって強調すべき点は強調するのが、鳥瞰図の鳥瞰図たるゆえんであろう。しかし、この二つの鳥瞰図の全体的構図がかかえている問題は、「華洛一覽図」や「ミヤコのパノラマ」だけの問題ではない。近世の京都を描いた京都図が共通にかかえている構図上の問題なのである。すなわち、先に述べたわたしの「困惑」とは、現代の地点から見た、近世の京都の空間認識に関する「困惑」なのである。

近世の京都図の例として、元治元年（一八六四）に出版された「皇都細見図」を見てみよう（図三参照）。地図の周囲は北山・西山・東山で三方を取り囲まれている。山がなかった南は、川と大池

で縁どられている。もっとも北に描かれているのは鞍馬山であり、最南端に位置するのが石清水であり、もっとも東が宇治の平等院であり、嵐山がもっとも西に位置する。このような範囲を京都図の中に描くのは、いわば伝統とでも言えるものであり、江戸期を通じて一貫している。

さて問題は、東西南北の山々や川と京都の市街地との関係である。(図三)から明らかのように、京都の市中の南よりの部分に東本願寺や東寺があるが、この二つの寺のすぐ南には川が流れており、川をはさんですぐ対岸には淀や伏見の町が描かれている。西に目を向けてみよう。市中のすぐ外を南北に御土居が走っているが、のちほど論証するように、御土居から西山までの距離が異常に短い。同様のことは、御土居と北山の関係についても言える。比較的正確に描いてあるのは、東山と市中の関係だけである。

このように「ミヤコのパノラマ」も「華洛一覽図」も「皇都細見図」も、ともに「洛中」に大きな比重を置き、「洛外」のなにものかを無視している。この文章はそれを見極めることによって、近世の空間認識の特色を明らかにしたのである。

二 近世京都図の概観

ここで少々、京都図全般のことを振り返ってみよう。矢守一彦の『古地図と風景』によれば、承応二年(一六五三)の京都図である

「新改洛陽并洛外之図」が近世京都図の画期になったという。特にこの図から「洛外の名勝・寺社も、とくに南方では淀城や宇治の平等院あたりまで広く包含する——重要なのは、収集範囲が洛外はるかにまで及んだということにあるのではない。すでに寛永・慶安図においても、東山・西山、あるいは北山の名刹・名所が、次第に図中にとり込まれてきていたのである(因みに、江戸市民の場合、郊外という都市空間を発見するのはようやく化政期にいたってからとされるが、都では——洛中洛外図の時代さらには平安王朝の昔から、都市域の内外に行楽空間を設定していたのである)。しかしその諸景観図は、なかば画面を飾るイラストでもあるかのように、都市部を縁どって配置されていたにすぎなかった。承応二年図にいたって、俄然、それらに(地理的位置)が与えられるのである。地図上の地物として記載されたのである。——洛外についても、初めて(地図)が作られたというべきであろう」。

矢守は続けて言う。「もっとも市中の縮尺に対し、洛外は著しく縮小されているが、これは測量や地図作成技術が素朴なためにおこったものではない。一定限の紙面に、洛外の要所をもひろく収容すべく、敢えて採られた技巧だったものと思う」。

矢守の指摘することで重要なのは、二点ある。第一は、「新改洛陽并洛外之図」から「洛外」に明確な「地理的位置」が与えられたという点。第二は、それにもかかわらず、「洛外は著しく縮小」さ

れて描かれていると指摘されている点である。この二つの指摘は矛盾するのではないか。「洛外」が明確に「地理的位置」を与えられているにもかかわらず、しかし同時に「著しく縮小」されているとするならば、はたしてそれは「地理的位置」を与えられていると言えるのかと疑うのである。私は、この矛盾は「著しく縮小」されて描かれているとされている「洛外」という概念の不明確さに由来していると考ええる。「著しく縮小」されたのは「洛外」の全体なのか、あるいはそのなかの特定の一部なのか。

「洛外」とは、なんであろうか。それはもともと単純に考えれば、「洛中」の外にある空間のことである。『日本国語大辞典』（小学館）によれば、「洛外」とは「みやこの外。京都の市街地の外側をさす。

——近世には西・南は豊臣秀吉の築いた御土居の外、東は鴨川以東、北は鞍馬口通以北をさすことが普通であった」とされている。たしかに「著しく縮小」されていない場所を「洛中」だと見なし、近世の京都図を子細に検討してみると、『日本国語大辞典』の説は説得的である。ただし「鴨川の東」を全面的に「洛外」に入れるかどうか、問題になるであろう。元禄四年（二六九一）の「新撰増補京大絵図」（図四参照）と同じく元禄九年の「京都大絵図」（図五参照）を見てみよう。たしかに元禄期の二つの京都図によれば、西と南は御土居で、北は鞍馬口通までを「縮小せず」描いてある。鞍馬口通以北で御土居の中の部分は、なにも描かれておらず「縮小され

て」かつブランクになっているし、西の御土居の内部の部分も同様にブランクになっている部分が多い。

一方、鴨川の東の部分は三条通から南の部分はほぼ「洛中」と同じ縮尺で描かれており、この意味では洛東の部分をもっとも「洛中」と「洛外」の区別がつきにくくなっている地域であろう。「縮小されて」地図上に描かれているかどうかを基準にして「洛中」と「洛外」を分けるのなら、鴨川の東の部分は「洛中」に入れるべきであろう。この洛東の部分の解釈は「洛外」とはなにかという問題に、わたしなりの回答を与えた後に再び考えてみることにしよう。

元禄の京都は、近世の京都の最盛期であった。享保一九年（二七三四）頃の「新撰増補京大絵図」（図六参照）では、洛東の部分が二条あたりまで市街地化され、「洛中」と同一縮尺になっており、また伏見の部分も市街地として描かれている。洛東のこのような傾向は幕末まで一貫している。慶応四年（一八六八）の「改正京町御絵図細見大成」（図七参照）では、幕末に京都がにわか政治の中心になったために、洛東の部分に大名屋敷などが建てられて市街地化して、ある意味では「洛中」化しているのである。同じく幕末の京都図である「皇都細見図」では、御所がやたらと巨大に描いてあって、「洛中」の部分の四分の一を占めるほどに描かれており、その意味ではユニークな京都図であるが、「洛外」と「洛中」の関係については今までに述べてきた京都図と同じ構造をもっている。

目を「洛外」の描写に向けてみよう。「新撰増補京大絵図」と宝暦八年（一七五八）の「改正京町御絵図細見大成」（図八参照）を比較してみよう。「新撰増補京大絵図」では、「洛外」は京都図の額縁のような位置にあった。京都図全体のなかで、「洛外」の占める面積は狭く、記載されている地物も少なかった。それでも一応は、鞍馬山（北）と石清水（南）、嵐山（西）と平等院（東）までの範囲をカバーした地図になっているが、基本的には「新撰増補京大絵図」は「洛中」図であったと見なすべきものであろう。ところが、近世を通じて一般的傾向として、しだいに京都図のなかで「洛外」の占める比重が増大していく。地図のなかで「洛外」の面積が増大するだけではなく、地図上に記載される「洛外」の地物が増え、しだいに京都図は「洛中・洛外」図という性格を強めてくるように思われる。

このような変化は、ミヤコ京都が「古都」京都になっていくにしたがって、京都の名所が「洛中」から「洛外」へ比重が移動していくプロセスに対応したものである。このことについては別の文章でふれたので、ここでは繰り返さない（『ミヤコの文明学』NHKブックス、一九九二年、を参照されたし）。さて限られた地図というスペースのなかで、できるかぎり多くの「洛中」と「洛外」の情報を盛り込もうとしたらどのようなことが生じるであろうか。「洛中」はすでに述べたように、「縮小されない」で描かれていた。「洛外」は

しだいに記載される地物が増加する傾向にあった。この二つの要請に答えるためには、地図を大きくするか、なにかを「縮小して」描くしかない。

地図とは実用的でなければならない。記載はより詳細で（しばしば「細見」という表現であらわされた）、豊富で（「新撰」「増補」がしばしばなされた）なければならなかった。増大する情報量を一定のスペースで処理するためには、なにかを犠牲にする必要があった。なにかを、「縮小して」描く以外にはなかった。では一体それはなにか。

三 「洛中」と「洛外」の間

近世の京都図がなにかを、どれほど「縮小」しているかを知るために、国土地理院の五万分の一の地図と何枚かの近世京都図を重ね合わせてみよう（図九参照）。京都図のほぼ中央部分に、ほぼ一直線に西から嵐山・西大路（「洛中」と「洛外」の西の境界になっている）御土居のほぼ同じ場所にある・二条城・鴨川（一応「洛中」の東の端といわれていた）・南禅寺が並ぶ。五万分の一の地図で、これら四者の距離を調べてみると次のようになる。嵐山から南禅寺まで、約一〇キロである。京都盆地の横幅としては、この部分をもっとも広いということになる。嵐山から「洛中」の境界の西大路までは約五キロ弱、西大路から二条城までは約一・八キロで、嵐山から

二条城までは六・五キロあり、これはもともと幅の広い京都盆地の中間点よりやや東よりになる。西大路から鴨川まで約四キロであり、これが近世京都の「洛中」の幅になる。

〔実際の距離と京都図における想像上の距離〕

実際の距離		京都大絵図（元禄九年）	
嵐山―南禅寺	一〇・五キロ	一〇・五	キロ
嵐山―西大路	四・七キロ	〇・八	四キロ
西大路―二条城	一・八キロ	二・三	一キロ
二条城―鴨川	二・三キロ	五・二	五キロ
鴨川―南禅寺	一・七キロ	二・一	一キロ

以上の準備をしておいて、こんどは「京都大絵図」（元禄九年）の嵐山・御土居・二条城・鴨川・南禅寺が実際地図上で描かれた「距離」から逆算して全体の一〇・五キロを比例配分してみよう。復刻された「京都大絵図」の嵐山から南禅寺までは約五〇センチであり、嵐山から御土居までは四センチ、御土居から二条城までは一センチ、二条城から鴨川までは二五センチ、鴨川から南禅寺までは一〇センチである。したがって、五〇センチを一〇・五キロだとすると、「京都大絵図」に描かれた嵐山・御土居・二条城・鴨川・南禅寺間の距離は右の表のようになる。国土地理院の五万分の一の地図から計算した実際の嵐山・御土居・二条城・鴨川・南禅寺間の距離と「京都大絵図」におけるそれらとのズレこそが、京都図でな

にを「縮小」しているかという問題への回答を用意してくれる。もともと大きいのは、嵐山と御土居の間のズレである。実際は五キロ近くある両者の距離が、わずかキロ足らずしかないように描かれている。

このような傾向は、嵐山と御土居の間だけではなく、御土居と京都盆地の西山との関係にまで一般化することができる。すなわち、「洛中」の西のはずれである御土居と西山の山際の間にある空間は、極端に無視されているのである。同様のことは、南の「洛中」の境界についてもいえる。多くの京都図では、御土居の南にはすぐ鴨川や宇治川が西流しているように描かれており、その川の対岸には淀城が位置している。御土居の北に接するように東寺があり、東寺と淀城の間は指呼の間しかないように描かれているが、実際は両者は九キロ近く離れている。ということは、御土居の南側から宇治川までの間にあるなにかが地図の記載から「著しく縮小」されているのは明らかである。特に、「皇都細見図」の南部の「洛外」の省略ぶりは極端である。

北部についても事情は同じなのでここでは繰り返さないが、洛東の部分については少々ふれておこう。というのは、京都図のなかで洛東の部分もともと「縮小」されている程度が少ないからである。すでに述べたように、鴨川の東ではかなり早い時期から市街地化が進んでいた。一種の「洛外」の「洛中」化が始まっていたのである。

「洛中」の境界線である鴨川から東山までごくわずかの距離しかなく、しかもそこが市街地化が進行していたために「縮小」できる余地がほとんどなかったのである。京都図のなかで、「洛中」から東の「洛外」にかけてがもっともデフォルメされていない部分であった。

さて、以上から明らかのように、京都図では「洛中」の西・南・北ではかなり大きく「縮小」された「洛外」が存在したことが明白になった。しかし、「洛外」が一律に「縮小」されたわけではない。「縮小」された「洛外」と「縮小」される程度がすくなかった「洛外」と、二つの性格が異なる空間があった。では、「縮小」された「洛外」には一体なかがあったのであろうか。「農地」である。「洛外」を「洛中」ではない場所であるとするならば、「洛外」には二つの性格の異なる空間が存在することになる。

第一は、山際の「緑地」である。ここには、嵐山や鞍馬や平等院や金閣寺や銀閣寺などに典型的に見られるように、峡谷や山や丘や池や野原や神社や仏閣がある。このような場所が京都をとりまく山々の山際にちりばめられ、「洛中」を遠くから取り囲んでいる。美しい自然のなかに「名所」や「古跡」が散在している。ここでわたしが「緑地」と呼ぶものは、ミヤコ人の教養や趣味に裏打ちされた人工的自然環境であって、たんなる純粋な自然ではない。すでに述べたように、このような「緑地」は京都が「古都」化していくの

に対応して、京都の重要な文化資源となり、京都図のなかでもその比重が増していった。「洛中」と「洛外」と普通に並列されるときの「洛外」とは、このような「緑地」のことを指していた。以下では「洛外」というときは、「緑地」のことを指すことにしよう。慶応四年の「改正京町御絵図細見大成」は、「緑地」の部分の記載がもっとも充実した京都図だが、山や川や丘や池の間にある「名所」や「古跡」とそれらを結ぶ道はかなり詳細に記載しているのである。「洛外」が、地図上の記載ではしだいに「洛中」なみになりかけているのである。

第二は、「緑地」と「洛中」の間には含まれた「農地」である。「農地」は近世の京都図においては最初から終わりまで、無視され続けた存在であった。京都は盆地のなかにある都市である。しかし、このことは京都の市街地が山際まで続いていることを意味しない。近世の京都図や「一覧図」がわたしたちに伝えているメッセージは、ミヤコ京都は「洛中」とそれをぐるりと取りまく「洛外」という「緑地」によって構成されているというものである。矢守一彦は、京都図で「洛外」が「著しく縮小」されたのは、「一定限の紙面に、洛外の要所をもひろく収容するべく、敢えて採られた技巧」であると解釈していた。わたしは、このような解釈に不満である。もちろん、そのような「技巧」上の問題もあったであろう。しかし、「洛外の要所をもひろく収容」する気がなかった時期の京都図において

も、「農地」は「著しく縮小」されていたことは確かなことであつた。「農地」はあたかもミヤコ京都の生活にとって、ほとんど存在しないかのように描かれてきたのである。

なぜ、「農地」はこのような地図上の記載で差別されてきたのか。わたしはその理由をミヤコ意識に求めたい。ミヤコ意識とは、イナカに対する文化的優越意識を背景としている。ミヤコ観念とミヤコ意識の詳細は、『ミヤコの文明学』にゆずることにして、ここで強調しておくべきは、「農地」と「緑地」とミヤコ意識の関係である。ミヤコのイナカに対する文化的洗練における優越意識は、ミヤコ人のイナカ人に対する差別意識である。言い換えると、差別意識とは人の人に対する態度である。「農地」は人々の労働の場であり、「農地」に対する差別とは、結局のところ「農地」で労働する人々に対する差別であつた。ミヤコ人であることの「誇り」の裏返しだが、このようなイナカ人への優越意識となり、ひいてはイナカ人の労働の場である「農地」への無視となつて結晶化しているのである。

ともあれ、「農地」は地図の上では著しく無視された存在であつた。しかし、ミヤコ京都の「辺」にそれは実在した。近世の京都図で「著しく縮小」されていた「農地」は、明治末から大正期にかけて京都が都市化のために膨張するにしたがつて、じょじょに「洛中」化せざるを得なかつた。「洛中」に「農地」を取り込まないかぎり、近代の京都の発展の余地はなかつた。京都の市議会である議

員は、まず「洛中」を拡大するよりも、「洛中」にある「農地」を排除すべきだという意見を述べている。「肥臭イ所ノ田園水田ヲ京都市ノ内ニ残シテアルト云フコトハ、如何ニ京ニ田舎アリト雖モモウ少シ我々ハ都市ニ就テ真面目ニ研究致シタイモノデアリマス」。

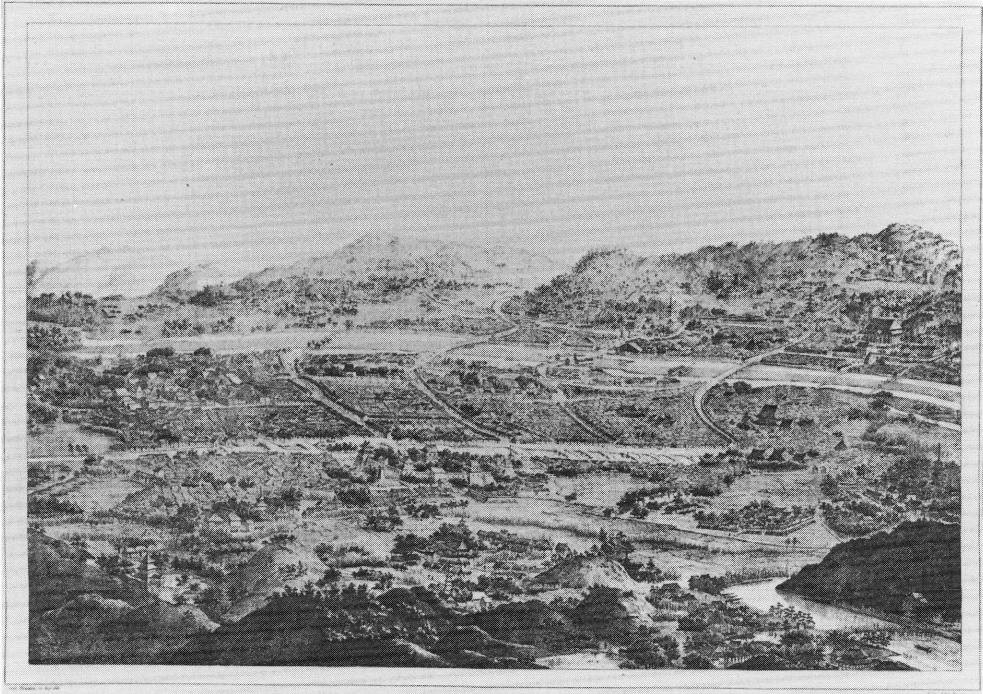
一方、「緑地」はたとえそこに人がいたとしても、みどりなす風

〔ミヤコ空間の概念図〕



鴨川・宇治川

景の一部としての人であり、人は「緑地」の主要な構成要素ではない。「緑地」という「洛外」はミヤコ意識にとって価値中立的な空間である。いな、密集した「洛中」にすまうミヤコ人にとって、自然に満ちた「緑地」という「洛外」は不可欠な存在であった。「洛中」の生活は、「洛外」の自然の中での行楽・遊興とバランスをとることではじめて可能になったのである。結局、「緑地」という「洛外」とミヤコ人の日常生活の場としての「洛中」の間にあつて、「農地」は近世の京都のミヤコ意識のなかに占める位置を見いだせず、ミヤコの空間から排除されたということにならうか。以上の議論を、ミヤコ空間の概念図としてまとめておこう。

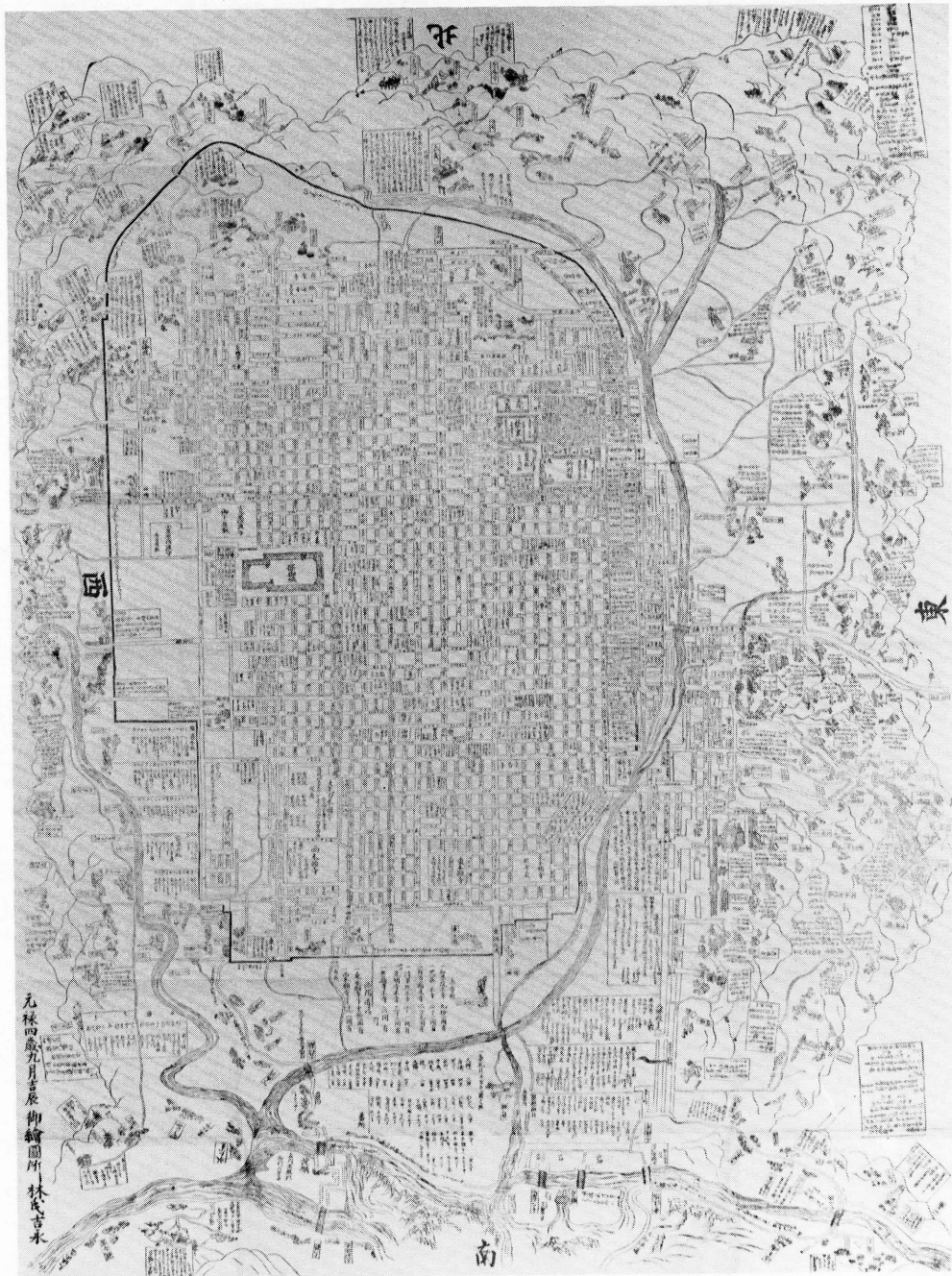


PANORAMA YAN MIAKO.

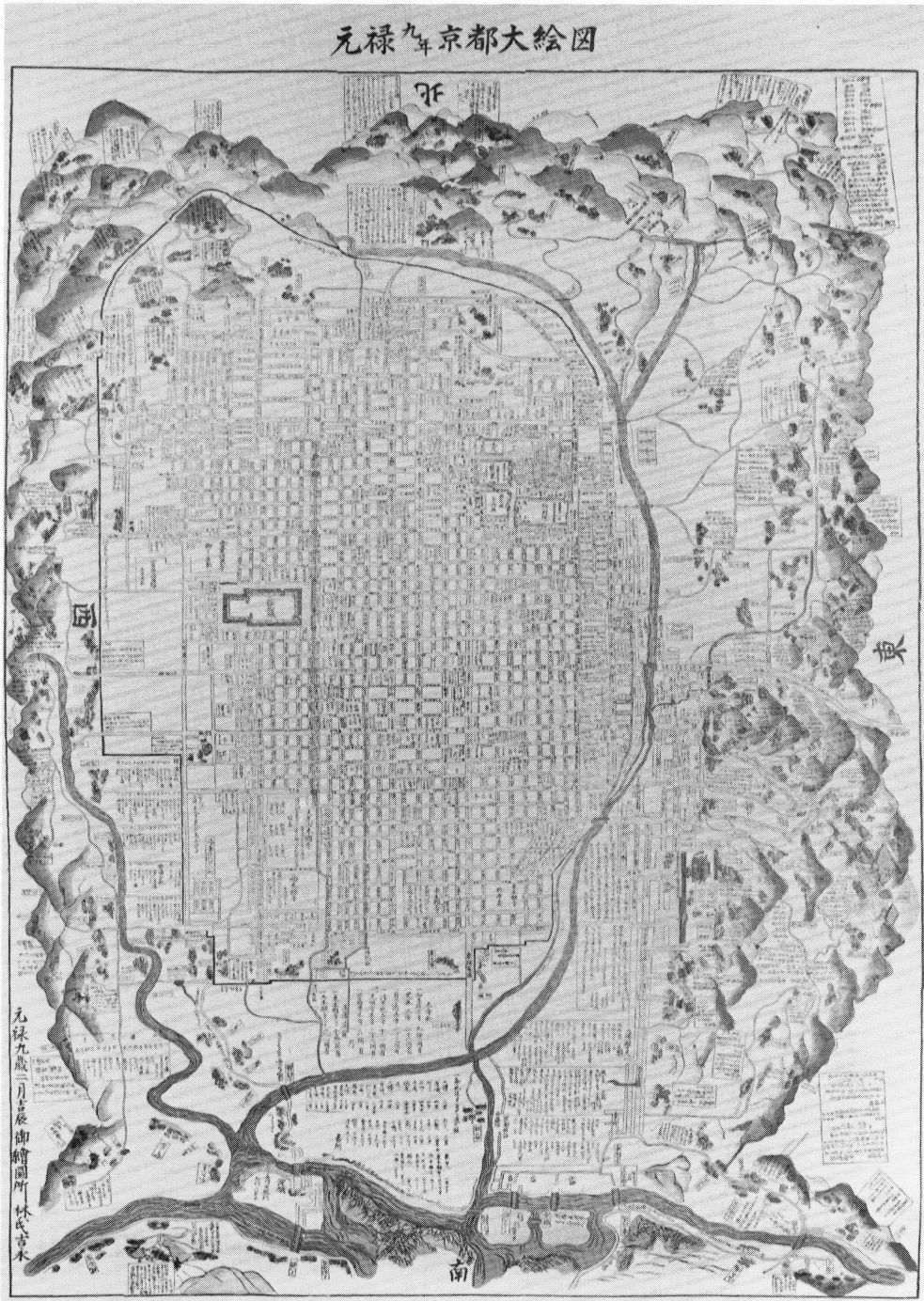
(图 1)



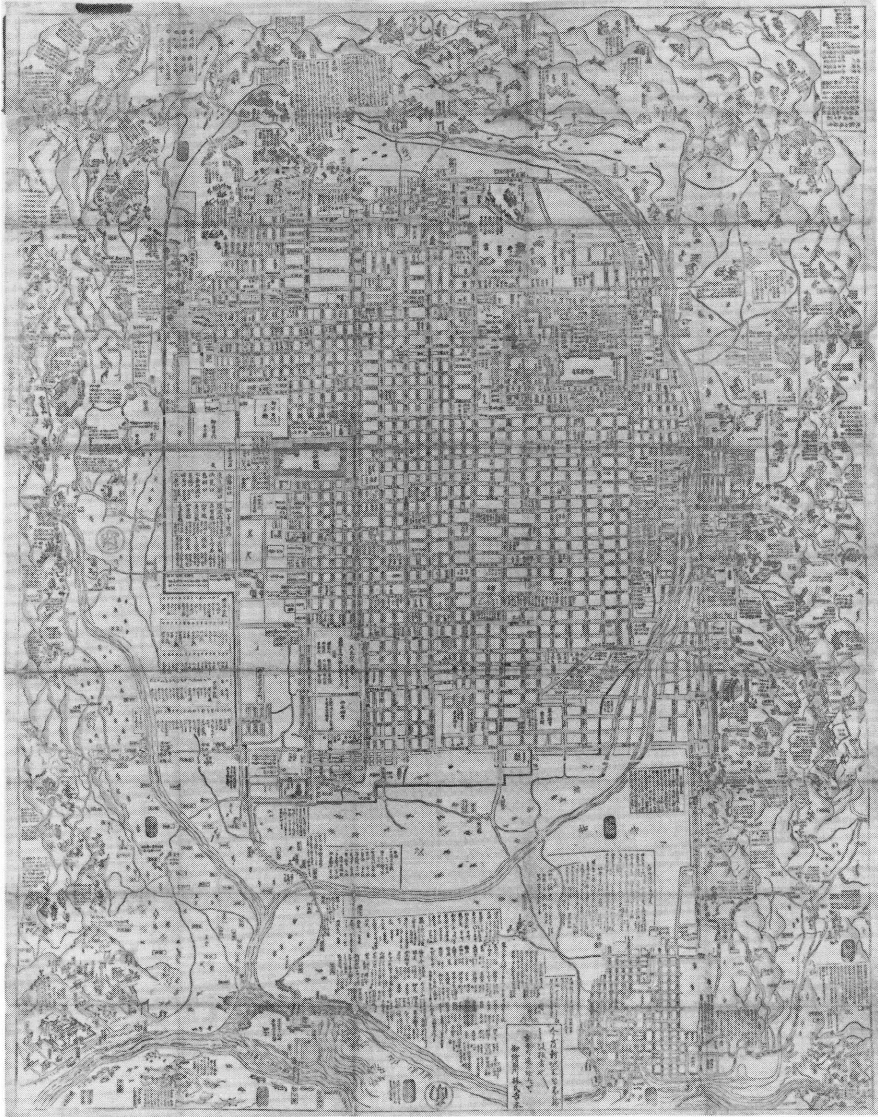
(图 2)



(图 4)



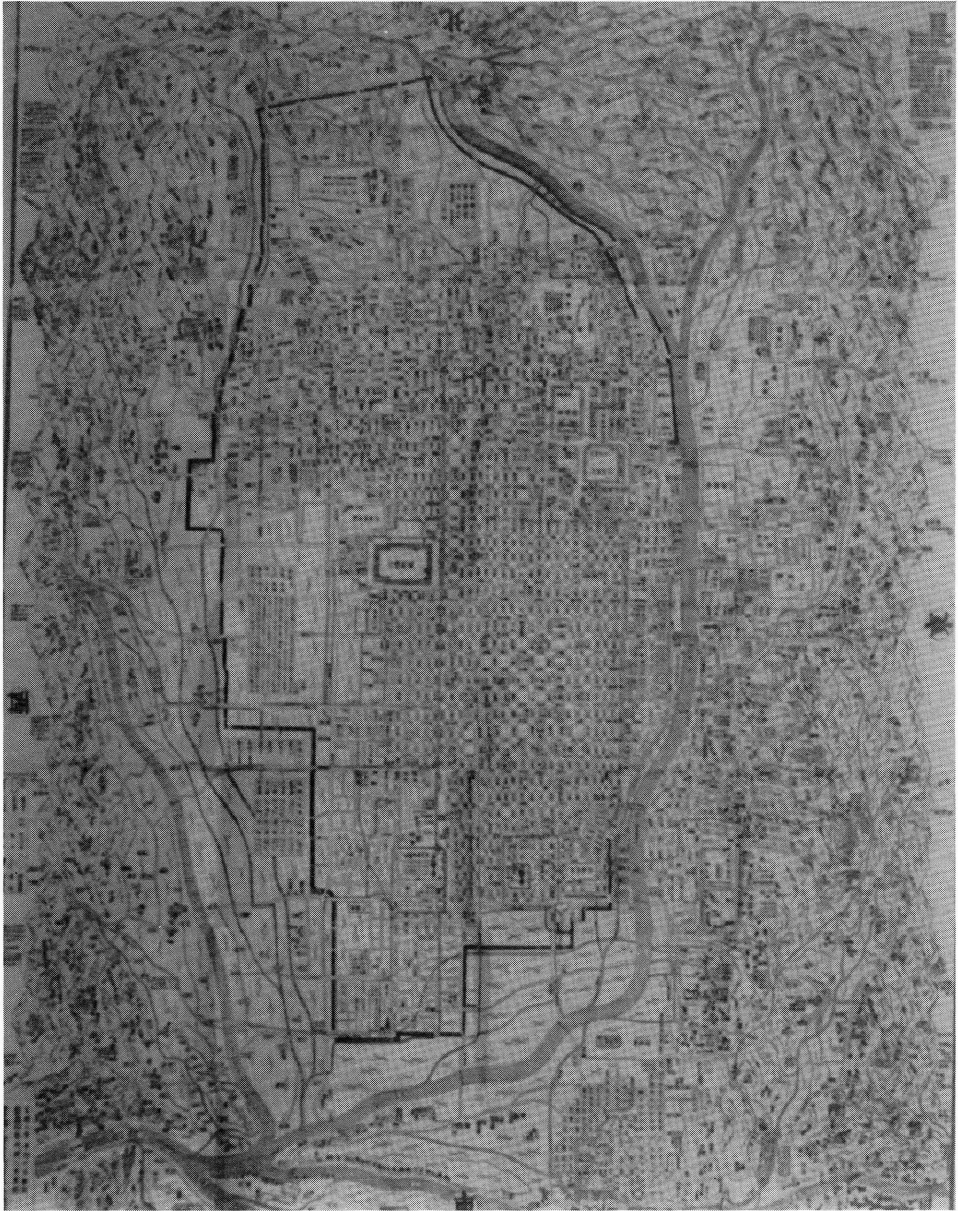
(図5)



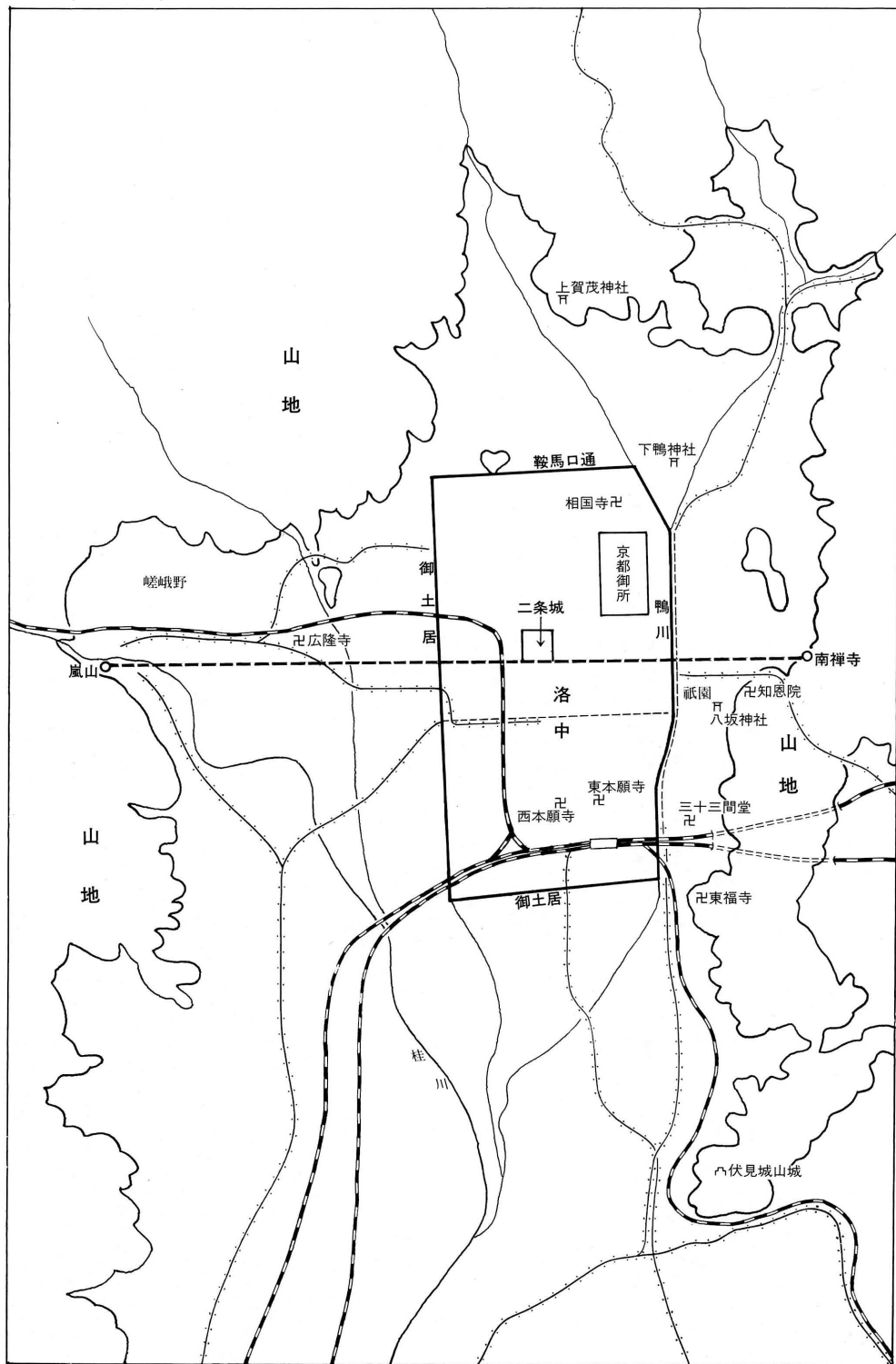
(图6)



(图7)



〔図 8〕



〔図9〕